
バカとテストとお姉さま

YOSI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストとお姉さま

【NZコード】

N3944M

【作者名】

YOSH

【あらすじ】

おどボクとバカテスのクロス物です。祖父の言いつけで文月学園へ転校した瑞穂がバカテスメンバーとともに繰り広げるコメディー？原作にそつて進む予定です。
Arcadiaでも投稿しています。

1話（前書き）

注意

この小説は瑞穂が高1の設定なので原作の2年前、つまり祖父はまだ元気に生きています

1 話

「転校ですか」

「ああ」

祖父に話があると書斎に呼ばれ向かうとそんなことを言われた。

「どうしてですか！？ 開成に入学してからまだ2ヶ月もたつていな
いのー！」

そう、今は6月、入学式があったのはついこの間のことなのだ。
学校生活もいじめられているわけでも問題を起しているわけでも
ない。でも……

「まあ、いいですよ。お祖父様の頼みですし。」

祖父は明治時代から続く鏑木財閥の流れをくむ鏑木グループの会長。
また、経済界に「経営の父」という異名を持つほどの辣腕家である。
それでも僕には優しい祖父なのでできるかぎりお祖父様の頼みは聞
いてあげたい。

「すまんな。開成での付き合こともあるだらうが

「大丈夫ですよ。学園では僕も周りも勉強ばかりしていて友達はあ
まりいないですし……。それで、僕はどうに転校するのですか？」

「ああ……、じこじだ」

一瞬暗い顔をしたような気がしたがすぐもとに戻り机の引き出しから一冊の入学案内を取り出した。

「文月学園…ですか。確か召喚システムで有名なところで、お祖父様がスポンサーになつていてる……」

「そ、そ、そこだ。あそこの学園長とは子供の頃からの付き合いですね。お願いしたらここによく受け入れてくれたよ。まあ…あいつのことだから何かたくさんでるかもしれないが、大丈夫だろ？」

「はあ……。わかりました」

こうして、不安になりながら僕の文月学園の編入はきました。

おまけ

「でもよかったです。了承しましたがどんな学校に通うことになるか少し不安で……。まあ、もし父様なら冗談で女学院に入れようとするでしょうが。最近、幸穂～て、母様の名前を呼びながら抱きついてくるんですよ」

「ハハ…。そんなことするわけ無いじゃないか。うん。そういえば、瑞穂は幸穂君に似てきたね。その大きな目や綺麗な栗色の髪、そして……」

祖父は満面の笑顔をうかべた後何かを誤魔化すように語り出した。
僕がこの笑顔の意味を知るのは2年先のことだった…。

「ほひ…、あんたが光久の孫の瑞穂かい？聞いてたとおり女みたいな容姿さね。」

転入初日、挨拶のため学園長室を訪れたところいきなりそんなことを言われた。

確かに女顔だつて自覚はあるし、母様の遺言で髪は腰まで伸びてるけど、そんな初対面でいきなりそんなこと言わなくとも……。ついでに光久とは祖父の名前だ。

「ふん。容姿を言われたくらいで落ち込んじゃあこの学園じややつていけないね…。その容姿といい、打たれ弱さといい、編入試験の結果といいほんと光久とは似て無いね」

「そんなに似て無いでしょ？お祖父様は自分のことをあまり話してはくれないのでわかりませんが！」

その言い方に少し頭にきたのでの反論してしまひ。

「全然似て無いね！あいつはひょろつとした容姿に中間位の成績で、人畜無害そうに見えて腹の中身は墨汁を100倍黒くしたような真っ黒さ…！いつだか悪口言つた次の日、机の中にカエルを入れられ、ばれないように隠蔽工作はしつかりとしているのにアタシにだけわかるような証拠をわざと残したり…、この前なんかはいきなり電話してきたと思ったたら「久しぶり。」そうそう、確か高校の時貸しが何個かあつたよね。今度そっちに孫が通わせたいと思うからよろしく。」とかいつてそのまま電話を切られ…！」

お祖父様…。なんてことをしているのですか…。

「あの…すいません…」

「ふん。まあ、アイツの孫だからってハツ当たりしたのは悪かつたね。それにそろそろ「失礼します、学園長」ちょうどいいタイミングさね。」

学園長と話していると浅黒い肌をした短髪のがつしりとした体格の男の人に入ってきた。

「瑞穂、この先生があんたのクラスの担任の西村先生だ。西村先生あとは頼みます」

「わかりました。鏑木、教室まで案内するからついてきてくれ」

「はい、わかりました。では学園長、失礼します」

そういつて僕は学園長室をあとにした。

「さてさて、これからどうなるさね」

Side 鉄人

西村だ。どつかのバカどもは鉄人と呼ぶが今は…まあ、いい。そんなことよりも今問題なのは転入生である鏑木瑞穂という生徒の容姿のことだ。すらりとした長身に腰まである綺麗な栗色の髪、透き通る白い肌、少し潤んだ大きな瞳、艶やかな唇……、どうみても女性、

しかもどぎつくりの美人の良家のお嬢様にしか見えない。最初見たとき書類が間違っているのではないかと本氣で悩んだものだ。今でも「実は女でした」と言われたら本氣で信じる自信がある。そんな生徒がうちのクラスに、はあ……。

「なあ鏑木、ホントに男なんだよな。」

「うう～ちゃんと男です……。自分で女顔だつて自覚しますがそんなに何度も聞かなくても……うう～。」

やはり何度も聞いてかわらんか……。しょうがない。

「鏑木、もうすぐ教室につくがその前に言つておきたいことがある」

こちらの真剣な雰囲気を感じてか、真剣な目を返してくれる。

「鏑木、自己紹介とき必ず性別をこうのを忘れるなよ。」

「はい? 何故ですか? 制服を見ればわかると思いませんが?」

「それでも納得しないバカはいるんだ。どうやら教室についたようだ。鏑木は呼ばれるまでここで待つてくれ。」

「あ、ちょっと待つてくださいーーー!」

そして鏑木を残して俺は教室に入つた。

side out

3話（前書き）

投稿し忘れていました。
本当の3話です。

s.i.d.e ????

「今日からクラスメイトが一人増えることになる。」

鉄人は教壇に立つなりそういった。

（クラスメイトが増える？？誰かがスライムみたいに分裂するのかな？スライムがいるとなると他のモンスターもいるはず…はつ！！！ということはいつか勇者がクラスメイト達を虐殺しにくるはず、となると……）

「ねえ雄一、勇者を倒すためにはどうすればいい？」

「なぜ転校生の話題から勇者が出てくるか、お前の頭の中身が謎だよ、明久」

「へ、転校生？」

あ、なるほど。一人増える分は転校生のことか…。

「雄一よ。明久の頭の中身など謎ではない。何も入っていないだけじや。」

「ちよつと秀吉……それはひどいよ！僕の頭にはちゃんと中身がつ

まつてこむよ。

「ほひ…。何が詰まってるんだ?」

と、雄一がにやにやと笑いながら聞いてくる。く、バカにして…。

「それはもちろん…」

このとき窓から風に乗つてある一オイが鼻を通り砂糖や塩しか食べてない胃袋を直撃した。

「カレー！！！」

せめて一オイだけでも食べようと窓辺に近づいて座りました。

「そうだな。頭の中にはカレーが詰まってるんだよな。」

「そうじゃな…。明久の頭の中はカレーでいっぱいじゃ。」

重大な過ちを犯してしまったことに。

「ち、違うんだ。これは風に乗ってカレーの二オイが運ばれてきて、やめてつつそんな優しい日で僕を見ないで~」

(もう二つ、ひどい話題を
変えなさい)

「アーリアのマジックカード」

「こわなつづいたのじや？まあ、ムツツリーーならあそ」じや。」

そして秀吉が指さした先には……

(力チヤカチヤツカチヤカチヤツ)

一心不乱にカメラをセットするムツツリーーが……。

「どつ、どうしたの？？」

「……転校生の姿を収める」

「あつ、そつだつた、西村先生つ！転校生は男ですか？女ですか？身長は高いですか？低いですか？胸のサイズは「グポお」ハハハつ、島田さんはバカだな、その関節はそつちにはまがらな、腕の関節がねじ切れそうなくらい痛いいい」

「女性の胸のサイズはね、軽々しく聞いていいものではないわよ」

「やつぱバカだな。」

「バカじやのう…。カレーすらも入つてなさそつじや。」

「ひどいよ秀吉、せつかく話題を変えたと思ったのにまた戻すなんて…」

「ええい、静かせんかーー！たくつ、鏑木入つてこい。」

ガラララ

鉄人に呼ばれ転校生が入ってきた瞬間、時間が止まつた。クラス全員が声を出すのを忘れ見入つている。

(カシヤカシヤ)

さつきまでうるさいくらいだった教室は静まりかえつてゐる。今ここに存在する音は転校生の歩くときに発生する靴音とムツツリーーのカメラの音? つて、ムツツリーー、キミはこの光景を見つめ自分を見失らずに、いや違うつ、あの顔はこの光景に惚けている。まさか本能で!..だとしたらキミは最高だよー!..すばらしいよ!..あとでその写真売つてくれないかな?..

(チラツ)

(ん?今こっち見なかつた?)

(チラツ)

(あつ、またこっち見た!..もしかして?..もしかしてもしかすると!?)

僕は頭の中で『転校生と僕と季節はずれの運命』の制作を開始した。その間に転校生は教壇のとなりで立ち止まり鉄人は黒板に転校生のであるう名前を書いている。今のところ、200話まで完成了した。

そんなことを考えていると鉄人は書き終わったみたいだ。

「ああー 鎧木瑞穂さんだ。」

「はっ、初めてまして、鏑木瑞穂です。」

声まで綺麗だ。制作もヒートアップしてきてもひらりの話を越えてしまった。

「開成からきました」

あの有名校から!! 鏑木さんは頭いいんだあ、すごいな。
神様この出会いに感謝します

もう誰にも止められないっ、『転校生と僕と~季節はずれの運命~』
総和数1000話以上!!今までに無いほどの超大作!近日公か……

「性別は、男、です。」

急遽公開取りやめ、上映禁止。
(神は死んだ……)

side 明久 out

s.i.d.e 瑞穂

あのあと、起動したクラスメイトに質問攻めにあい（ホントに男なのか？と何回も聞かれた、うう～）その質問も何とか落ち着き授業が始まるので教えられた席に座った。

「転校生、俺は坂本雄二だ。隣の席のよしみでこれからよろしく頼む。」

「あ、鎌木瑞穂です。よろしくお願ひします。」

隣の席の人気が話しかけてきた。質問の時もそつだつたけどこのクラスの人達はフレンドリーな人が多くて早く馴染むことができそうだ。それはそうと…

「あの…、隣の席の子は大丈夫なの？涙を流しながらぶつぶつ言つているけど？」

「ああ…、」といつは吉井明久つていつて、まあ…いつものことだから

いつものことなの…か？まあクラスに一人くらいそういう人も…いる…のかな？

「…神は死…女…男…第3の姓…の娘は世界を救う…」

「…こつもの…となの…？」

さすがに許容範囲を越えてしまった。

「？いつものことだが？」

普通に返されてしまった。あれ？僕の方がおかしいのかな？つていけないいけない、今は授業中だった。大声出しちゃったけど大丈夫かな？回りを見てみると…

教科書を読んでいる先生

ノートをとっている生徒

ノートをこじらせてしている生徒

教室の隅に座っている生徒

よかつた…、誰も気にしてないみたい…あれ？何か変なもの混じつていたような？

黒板に教科書の内容を書いている先生

ノートをとっている生徒

カメラをこぢらに構えて写真をとっているけど生徒

教室の隅に座って何か言っているけど生徒

その生徒に向かって歩いている生徒

絶対おかしいしなんだか増えてる…

「ねえ…、坂本くん」

「ん、なんだ？」

「こつもの」となの？」

「？何のことを言っているか知らんがいつものことだと細べへ

そりなんだ…

「…男…男…」

「ふ…、だらしないな」

「てめえ、須川…！おめえに俺の気持ちがわかるのかよ…初恋だつたのに…。一目見た瞬間おちてしまつたよ…。それなのに！男だなんてつ…！」

「ふつ、若いな。確かにあのことは自己紹介の時男だと言つた…。だが…男は男でもあのことは『男の娘』だ。男とみたら可愛すぎて、女とみても可愛すぎる。そんな存在が…あの娘だ。いわば第3の性別！何を悲しむことがある？..」

「須川…いや須川会長！俺が間違つてた。ありがとう…」

「ふつ、気にするな…」

「よし…やつやくをせねブウハ…！」

「貴様…！…我らの女神に何て」とおこりみとじてこの…異端者だ
！審問官よ集まれ！」

『我ら異端審問官』

「男とは」

『愛を捨て哀に生きるもの』

「これより異端審問会を開始する……」

「つい、絶対おかしいよ……これがいつもの授業風景なの…？」
「うわッ！」

興奮してたせいで立ち上がったとき机に足が引っ掛けてしまい、
隣で写真をとっていた人も巻き込んで転んでしまった。

「ど、大丈夫か、鏑木？」

「いたた…、僕は大丈夫。あ、ごめんなさい。えと…」

「…俺は土屋康太。気にす（ダクダク）」

「あ…、すごい血が。大丈夫？土屋君？えと、血をまざとめないと」

「シヤーー

「え…、どうしてもつと激しくなるの…？」

「ムツツリーの鼻血はいつものことじゃから気にしない方がいいのじゃ。あ、ムツツリーとは康太のあだ名みたいなものじゃ」

「この鼻血がいつものことって…えと君は？」

「ワシか？ワシは木下秀吉って言つたんじや。おぬしとは他人の気がせんのでな、名前でよんでもしこのじや。これからよろしくなのじや」

そう答えたのは女の子みたいな顔をした男子生徒だった。たぶん、この人も…

「このわざよろしくお願ひします。瑞穂とよんでもください。同じ悩み持つものとしていい友達になれそうですね。」

キーンゴーンカーンゴーン…

「ではこれで授業を終わります。起立、礼

秀吉と友人をきずいていると授業が終わってしまった。それにしても異端審問とか鼻血とか吉井くんとか…こんなのが普通だなんてこのクラスはおかしいと思つ。このクラスに馴染むことはホントにいいことなのかな？

こうして僕、鎧木瑞穂の文月学園での生活は始まった。

そういえば、結構つるとかつたと思つけどなぜ先生は何も言わなかつたんだろう？

おまけ

「は、僕は今まで何をつてムツツリー——!」

「……あ、明久……」

「ムツツリー——つー大丈夫しつかりしてーべつ、ビツヒービンなどに……」

「……明久……写真は……とれた……ガク

「ムツツリー——つー——!——!——!——!

「あ、あれも?」

「「こつもの」とだ(じや)」「

side 光久

「瑞穂。最近の学園生活は大丈夫かな?」

食事中、何気無くたずねる。

「最近ですか?…そうですね…、そりいえばこの前明久が…」

（ふむ…、やはり瑞穂は明るくなつた。やはり友達の存在は大きいな。今まで勉強ばかりでまわりまでそんな雰囲気だつたからな…。）

「…その時なんか…」

（笑うことも増えたしな。今までは他人に興味を持てなず、どこか冷めてたしな。その友人達に感謝だな。問題があるとしたら…。）

「…何故か二ンジンを持つてきて…」

（その友人達がバカだということだな。）

調べさせるとこのままでは進級時クラスが離れてしまうことがわかつたし。瑞穂は絶対Aクラスになるだろうしな。

（どうか瑞穂も友達との時間のせいで勉強ができないはずなのに編入時から成績が下がつてないとは、誰に似たんだか…、僕や息子ではないな。幸穂さんかな？容姿も似てるし…まあ、せっかく文月学園に編入させたのに開正に似た雰囲気のAクラスになつたんじゃ意味ないし…。うん、一肌脱ぐか！）

「… そういえばお祖父様、学園長が言つていた机の中にカエルを入れたってホントですか？」

「ハハハ…、カオルはいつも大袈裟に言つんだよ」

（まあ、やつたんだけど嘘は言つてないしね）

「そうなんですか…。あ、お祖父様これで失礼します。」

そついつて部屋に戻つていった。

（とりあえず薬を取り寄せるか…）

side out

side 瑞穂

「全員動くな！ 鞠を机の上にあいて見えるように開け！」

西村先生は教室に怒鳴りながら入つてきた。何人かそわそわしている。かくゆう僕もいけないと思いつつ明久に借りていたゲームを返すためカバンに入つている。

(どうしよう…、借り物なの回収をやつしよ。)

「次、鎬木！」

とつとう僕の番になってしまった。明久、「ゴメン…。

「よし！ 次！！」

あれ？ ずいぶん軽いな。これなら秀吉達も…

「坂本、お前はポケットの中も見せや」

「…へやつ」

そうこうして雄一はMP3プレイヤーを没収された。あれ？

「吉井！ …貴様はジャージも着るな！」

生徒によつて検査のレベルを変えるのはほめられることではないけど… 明久、カバンの中身の9割はゲームやマンガって持つてきすぎだろ…

side out

side 明久

「さて、持ち物検査で時間が過ぎてしまったのでＨＲは省略だ。
時限日はいよいよ『試験召喚実習』だ。速やかに着替えて体育館に
移動するよ！」

そういうて鉄人は僕のお宝を持って教室を出ていった。

「やれやれ、災難だつたな。」

「ああ～僕のお宝達が…。そこには雄一は何を没収されたの？」

「俺はＭＰ3プレイヤーだ。くつ、先月買つたばかりだったのに」

「あ～それは悲惨だね。ムツツリー、や秀吉は？」

「…カメラや撮影道具一式すべて…、くつ」

「ワシは演劇で使う小道具をな…。いくら部活で使うといつても聞
いてくれなかつたのじや」

「みんないろいろ没収されてるみたいだね。僕もお宝を…」

「すべて手放すには惜しいものだったのに…。鉄人めええ…！」

「いや、明久の場合持つてきすぎだよ。」

声のした方を見ると瑞穂がこっちに向かってきていた。

「瑞穂は何か没収されたのか？」

「ううん、明久から借りたゲーム今日返す約束だったから持つてき

たけど僕の時は軽かつたから。はい、ありがとう明久面白かったよ

よ

「へ？あ、うん。どういたしまして

瑞穂の笑顔にみいつてしまつた。ただでさえ綺麗なのに笑われたらもつ反則だよ…

「そんなことよりそもそも移動しなくていいのかのう。着替えの時聞も考えるとギリギリなのじゃが」

「あ、そうだ急がないと。行こう雄一、ムツツリー。秀吉、瑞穂また体育館で」

「ちよと待つて（待つのじや）」「

「ん？どうしたの秀吉、瑞穂？早くしないと遅れちゃうよ。」

「どうして別れる必要があるのじや…？」

「やうだよー向かうところは一緒なのにーー。」

「向かうところは一緒つて…まさか男子更衣室で着替えるつもりなのー？だめだよーもつと慎みを持たないと。それに専用の更衣室もあるじやん

そうなのだ。常識人と名乗る奴等と紳士委員会が衝突し『第2次紳士戦争』が起きたことは記憶に新しい（第1次は4月に起き紳士委員会は敗北した）。結果は紳士委員会が勝利し「一人を特別扱いはできんが2人いるなら…』と『男の娘用更衣室』を勝ち取った！

噂では、今は海パンをスクール水着に変えるためいろいろ動いていると言う話だ。第3次紳士戦争が起きる日も近いかも知れない。

「いやなのじやーなぜワシらがそんな変なところで着替えんとなんのじやー?」

「 そ う だ よ ！ ！ 何 回 も 言 う け ど 僕 達 は 男 だ よ ！ ？」

そんなこと言われても…

緒に着替えたと!!(アシャー)

- ああ、
ムツツリニシテ!!!! かりして!!!!

「瑞穂、秀吉、気持ちはわかるがこれ以上は命にかかる。時間もないし諦めてくれ。」

תְּלִינָה

「でも、何でもダメかの？」「

ふ、2人とも、そんな悲しそうな目でこっちを見ないで～！～罪悪感で胸がつぶれそうだよ～～！！

「もう二回」とだからまたあとでね! 行くよー雄一、ムツツコーー!

「あ、行つちやた…」

「…着替えに行くかのう…」

「…そうだね

僕らは走ってその場をあとにした。

s i d e o u t

s i d e 瑞穂

僕と秀吉が着替え終わり体育館に着いたときにはもう始まってしまつていた。

「お、やつと来たか。遅いぞ！瑞穂、秀吉」

「『メソン』『メソン』、やつぱりあそこで着替えのに抵抗があつて…。それより何でムツツリーーは落ち込んでるの？」

「ん、ああ。あれのせいだ。」

そういつて1人の生徒を指差す。

「えと、いつもですか？試験召喚！」
サモン

指の先には体操着姿の姫路さんがいた。

「あ～つまりせつかくのシャッターチャンスなのにカメラが没収されたいでとれないから落ち込んでいたと…」

「（ハシブン）…そんなことない」

そう言いながらもその否定の態度も弱々しい…

「それにしてもさすが姫路のじや。強そりじやの「」…」

姫路さんをデフォルメしたというのもあるが、装備もかなりちやんとしたものなので、外見は召喚獣達の中でもかなり可愛らしげ。しかし、その手に握られた武器は、召喚獣の背丈の倍はあるひづかという両刃の大剣。召喚獣の武器の強さはテストの点と比例するのでこれはかなり高得点だったのでしょうか。

『Cクラス 姫路瑞希 VS Cクラス 古河

あゆみ 総合科目 3934点 VS 1264点

』

「ええ～い！」

その掛け声とともに降り下ろされた剣に相手の召喚獣は倒れた。

「さすが姫路だな。4000点近いじゃないか。…それと明久、なぜお前は瑞穂のことを見つめてる？まつきり言つがキモいぞ…」

「へ？ふあ～！」

「あ、こ、これは違うんだ！！ただ瑞穂の召喚獣はどうなるのかなって思つて。確か霧島さんと1位の座を競つてたよね？…」

「…、キモいは言こ過ぎだよ…」

「それはワシも氣になるのじゃ」

「…氣になる」

「うんどうなるんだろう? でも剣道、薙刀、フーンシングは習つ
ていたからそれだつたらいいな」

あとは空手や合氣道だけどそれじゃ武器を持つ意味ないしね。

『次、鎬木瑞穂!』

「あ、呼ばれたみたい。それじゃあ行つてくるね」

「あ、頑張つてね」

「うぬ、応援してゐのじや」

「さて、どんな装備になる?」

「…がんばれ

友人のjin声援を背に僕は召喚フィールドのある方へ向かつた

もう相手の生徒は準備ができるみたいだ。

「西村先生、もう召喚しちゃつていいですか?」

「ああ、一人とも構わんぞ」

「さうですか、ではいきます」

すう、と軽く息を吸つて、

「 試験召喚^{サモン}！」

その瞬間僕の足元にデフォルメされた召喚獣が現れた。

『おおお～～～』

僕の召喚獣は手に弓を持ち背に矢筒を背負つていた。

「ほう…、飛び道具とは珍しい」

「そんなことよ」

僕の召喚獣の服装が問題だった。日本人なら一度は見たことが、特に正月に見ることが多い服装…。

「どうして巫女服なんですか！？」

『Eクラス

鏑木瑞穂

4312点

V S

Eクラス

佐藤勇

1312点

』

この瞬間点数が映し出される。

「俺に聞かれてもわからんが防御力はしつかりしてるとと思ひや。」

「そり意味じやなくて！…と、とりあえず早く終わらせないと！」

召喚獣を操作し『』を引き矢を放つ。召喚獣の操作は難しいと聞いていたが思ったよりは簡単だつた。矢は相手の胸に当たり…

『へ？』

その部分が消し飛んだ。

『勝者 鎧木瑞穂』

そして僕の初召喚は終わった。

5話（後書き）

指摘があつたので編集しました。

side 明久

「ふう…。今日は持ち物検査に始まつて、一日中災難続きだつたよ…。」

「ホント、今日はやんざんだよ…」

「…あつたぐだ」

放課後。僕らは、いつものメンバーと教室でグチつてた。

「明久とムツツリーーは自業自得じやが瑞穂は災難じやつたの」

「ありがとう秀吉、でも秀吉もいろいろ残念だつたね。演劇の西村先生も小道具くらい見逃してくれてもいいと思うんだけどな…」

「やうじやのう…、そのせいで今日は部活を休み買い出しにいかねばならんしのう…」

「あ、だったら一緒に行かない? ちょっと僕も欲しい物があつてさ…」

「もちろんここのじや。明久達はビアあるのじや?」

「うへん、今日は遠慮しどくよ」

女同士の買い物を邪魔するのは悪いしね。それにしても…

「あ～あ、せっかく今日は『召喚実習』だけで授業のない一日』なんて思っていたのにな～」

楽だったけどこれならいつもの授業のある一日の方がマシだった。

「召喚実習か…」

僕のボヤきを受けて、雄一が感慨深そうに呟く。

「どうしたの、雄一」

「いや、俺たちも来年からは試験召喚戦争ができるようになるんだな、と思つてな」

そう告げる表情はどこか嬉しそうにも見えた。

「雄一は戦争を起すきなの？」

「ああ、それが目的でここに入学したようなものだしな。たぶんAクラスの代表は瑞穂か翔子になると想つがその時はよろしく頼む。」

「ええ～やだよ恥ずかしくて召喚獣あまり出したくないし……あれ？圧倒的な戦力差なら誰も攻めてこないんじゃないかな？そうなれば召喚しなくていいし…。よしーもつと勉強頑張ろつー！」

なぜか瑞穂が黒くなっている。そんなに召喚獣に不満があるのかな？強くて可愛かったのに…。ん? こういえば雄一、霧島さんのこと名前で呼んでいたけど…

「ねえ雄一、霧島さんと『吉井』どこにいるの～？またくわ
チに掃除押し付けてどこに隠れているんだか」

そんな声が廊下から聞こえてきた。

「なんだ明久。お前掃除当番だつたのか？」

「うん。同じ班の島田さんに任せて逃げてきちゃつたんだけどね」

「いくら仲が良くても一方的に押し付けるのはだめだよ。ちゃんと島田さんに謝ら『もうつ。見つけたら、手足を縛つて3階から突き落としてやるんだから』ないと？」

出た瞬間殺られる！！

「つて、島田さん…そんなんことしたらさすがの明久でも死んじゃうよ…？」

「あ、瑞穂。吉井のこと見てない？」

「そんなスタントマンもびっくりのアクションをさせようとしている人に教えるわけないよ！！」

「冗談に決まってるじゃない。ウチがホントにそんなことあると思つたの?」

「そうこうセリフはせめて手に持つてこのロープを隠してから言ってください……。」

今のうちに教室から逃げ出す。

「あ、吉井へ、待ちなさい」

命のかかつた鬼ごっこスタート

「ねらいえば瑞穂もシッコニが板についてきたの?...」

「ああ、本人としては不本意だと思つが...」

side out

side 瑞穂

「それではまたの」

「うん。明日学校で」

秀吉との買い物も終わり歩いていると見知った人影が...

「あれ? ねえ明久、こんなと『ひつーつてなんだ瑞穂かおどかさないでよ...。島田さんかと思つたよ』あ、ゴメン」

こんな所まで逃げてきたんだ...。確か学校から商店街まで3駅は、離れているのに...

「それにしてもファンシーショップの前に立ち止まつてどうしたの？」

「それは姫路さんを追いか、お人形に目覚めてね！－！」

それはどうやらにせよアブナイヒトだよ…。

『葉月一生のお願いです、どうしてでもこのノイチちゃんが欲しいんです。お願いしますおじさんひー。』

『やうは言つても、うちも商売だしねえ…』

と、中からそんな口論が聞こえてきた。明久が入つていったので僕もそれに続く。中では困った顔の店員のおじさんに小学生と思われる女の子が必死に頭を下げていた。僕は…

「ねえ、どうしてそんなにそのぬいぐるみが欲しいの？」

その女の子に話しかけていた。今までの僕なら周りで見ていただけなのに…

「ふえ、おねえちゃんは誰ですか？」

「僕の名前は瑞穂です。あなたの名前は？」

その反応が可愛らしくて自然と笑顔になつてしまつ。

「葉月の名前は葉月です！－あのね、最近お姉ちやんの元気がない

から、前から欲しがっていたこのぬごぐみをプロジェクトして、元気になつてもらおうつて思つたのです…」

「わー…、でも葉月ちゃんはお姉さん思いのこ子ですね

そうじつて頭をなでてあげる。葉月ちゃんは最初気持ちよさうに目を細めていたがだんだん暗い顔に変わっていき今では皿に涙をためて

「お姉ちゃんはいつもいなババやママの代わりにお掃除とかお洗濯とかして、葉月と遊んでくれたりもして…そのお姉ちゃんが元気ないのに葉月はなにもすることができなくてキヤツ…」

「泣かないで、葉月ちゃん。葉月ちゃんが泣くときと大好きなお姉さんが悲しむと思つよ」

葉月ちゃんを胸に抱きしめ頭と背中をなでてあげる。本当にこ子はいい子だ。出来る限り力になつてあげたい。

「お姉ちゃんとってもポカポカしててあつたかいのです。なんだか安心するのです。」

よかつた。なんとか落ち着いたみたいだ。

「安心して葉月ちゃん…お兄ちゃんがなんとかしてあげるから

「本当……お兄ちゃん、ありがとウ…」

明久の言葉に嬉しそうに笑う葉月ちゃん。でも確か明久つて…

「ねえ明久、ちなみに今いくら持っているの?」

「え~と、だいたい2000円くらいかな?」

「…店員さん、そのぬいぐるみはこいつですか?」

「税込み2万4800円になります。」

「…………」

「…お兄ちゃん?」

葉月ちゃんの悲しそうな顔。やつぱり…。

「…瑞穂はいくら持つてる?」

「今だと1万円くらいかな」

明久はなにか考える仕草をしたと思つたらいまなり顔を上げた。

「おじさん、1万2000円だとだいたい半額くらいですよね?」

「ああ、ちょっと足りないけどね」

「そこで僕からの提案です。ぬいぐるみを半分に裂いて右半身だけ売つてもらえ、え、どうして3人してバカを見るような目で僕を見ているの?」

「…キミは、本当に高校生かね?」

「…バカなお兄ちゃん」

「本気で言つてるの?」

「うめだつたとは…」

「あ、あの少しの間でここまで売つ出れないでくれませんか」

「まあ、それくらいこなれ」

「あつがといわざるこもれ」

「うひつて、この交渉は終つとなつた。」

side out

side 明久

「葉月ちゃん。お父さんやお母さんにお願いできなーいの?」

店を出で、僕らは近くの公園で作戦会議をしていく。

「ふたりとも、あんまりお家にこないの……」

「やうなの……」

そういう瑞穂は膝に座つて、悲しそうな顔をした葉月ちゃんの頭をなでる。ホントによく懐いているな。

それにもお金か……、いつもゲームやマンガを買つているせいでもお金無いんだよな。仕送りまだまだあるし……、まあそのお宝達も鉄人に没収されたんだけどね。こんなことなら買わなければよかつた。そうだとしたらその分お金があつたのに。

「ん? そ、うか。その手があつたか!」

「どうしたの、お兄ちゃん?」

「どうせ戻つてこないと諦めていたし、たぶんそのくらいの額には……よしつー葉月ちゃん、明日の今頃この公園に来れるかい?」

「へ、うん。だいじょうぶだけど……」

「じゃあ、明日またここに来てね。今日はもう遅いからお家に帰る

「う

「あ、え、えと」

「葉月ちゃんはいきなりあわてだした。どうしたんだろ?」

「うふふ…どうしました?」

「うんと…もし…ね、お姉ちゃん。明日葉月と一緒にしてほしいのです…」

「…やべ落ち着いたと思つたら瑞穂にトークの誘いをして、え…葉月ちゃん 学生でしょ…? 最近の 学生はこんなに進んでいるの…! 僕だつてしまつたこと無いのに…。…とこつかなんどといひ修正をされてるの?」

「…僕によりしければ」

「本当に…お姉ちゃんあつがとう…」

「…いい、瑞穂がいいつしや。よかつたね葉月ちゃんんんん…! 瑞穂…は〇くしちゃダメだよ…警察に捕まつちゃう…!」

「僕たちの学校は召喚システムの整備でお皿には終わりますが葉月ちゃんの学校はいつ終りますか?」

「葉月もお皿で学校終わりなのです…」

「では、学校が終わったあとこの公園で待ち合わせ…ところのまば

「うひしょ、うへ」

「うふー、こよお姉ちやん……」

ああ～～どんびん話が進んでく…

「また明日ね……お姉ちやん」

「わよひなひ、葉円ちやん」

葉円ちやんが見えなくなるまで手を引る。

「…ねえ瑞穂大丈夫なの？」

「え、なにが？」

「その……葉円ちやんはまだ小さな女の子なんだよ？」「一トなんかしだらその……」

「わあああ……何変な」と言つてゐのー？ただ普通に遊びに遊ぶだけですーーー。それにひ、葉円ちやんの両親はあまり家に帰らない。そうだからきっと誰かに祟りたいんだと思つてね……」

そういう瑞穂の顔はなんだか寂しそうで、バカなこと考へてた自分が恥ずかしい……。

「わひいえば明久、お金なんだけど……」

「心配しないで、ちやんとあてはあるから」

「やつこつ」とじやなくて……」

「大丈夫僕に任せで……瑞穂は安心して明日のデート楽しんでね！」

汚名返上の機会だ……これは譲れない。

「そ、そう？」

とりあえず、明日雄一達に相談かな？

「没収品を取り返したい、だと？」

翌日、いつものメンバーに相談した。

「…明久に賛成」

さすがムツツリー、一番早く賛成してくれた。

「雄一と秀吉は？」

「ふむ……、そうはいっても没収された物は買い直してしまったしのう」

「それに相手は鉄人だしな……」

この2人はあまり乗り気じゃ無いみたいだ。ムツツリーーーと2人ではちょっときついかもしれない……。

「…む、そういうえば何故瑞穂は反対しないのじや？」

「ああ、いつもなら真っ先に止めてるだろ?」

「…僕は理由を知っているからね。悪いことだとはわかつているけど明久のお願いを聞いてくれないかな?僕も参加したいけど今日は用事があつて…」

「瑞穂の頼みじや仕方がないの?」

「ああ、こんなバカなことは俺たちに任せとけ!」

「ちょっと、なんで瑞穂の頼みではすぐきくの!-?」

「さつきまであんなに渋い顔をしてたのに!」

『あたりままり前だろ(じやろ)』

な、泣かないもん!!

side out

たつぱり葉月ちやんと遊び、今は手を繋いで約束の公園まで歩いていた。

「お姉ちやん、今日もとても楽しかったのですー。」

「また遊ぼうね、葉月ちやん」

公園に入ると明久が大きな包みを持っていた。

「あ、お兄ちやん」

「やあ葉月ちやん、今田の『トート』楽しかった？」

「はい、とっても楽しかったのですー。」

「最後に僕からプレゼントがあつてね、はーーー。」

「やつたーーお兄ちやん、あつがといひすかーー。」

「よかつたね、葉月ちやん」

そつこつて頭を撫であげる。すると葉月ちやんは『貯金箱』を手渡して、
「田を細めた。

「んーやーー。あ、やつだ。お兄ちやん、ちゅうと財貨じへべださー
いっ、お姉ちやんはしゃがんでくださいー。」

「うふ~♪したの?」

そりこってしゃがんであげる。

「ありがと~、お兄ちゃん、お姉ちゃん」

チユツ、チユツと明久は頬に僕は唇にキスされた。

『な、な、な…』

「お兄ちゃんはバカだけど優しいから好きですっ! 葉月のお嬢さんにしてあげますっ! お姉ちゃんはとってもあたたかくてとっても優しいので大好きですっ! 葉月のお嫁さんになつてくださいっ!!」

「…」

初めて…キスされちゃった…。

「あとお姉ちゃんの」とお姉さまって呼んでもいいですか? お姉ちゃんはもうこるので」

「ええ…」

「本当…? ありがと~! それじゃまたねお姉さま…」

「くつ~あ、ねよつと待つて…」

いつのまにか呼び方が『お姉さま』になっていた。さすがにそれは…。だけどもう葉月ちゃんは帰ってしまった。うう~。

「えと、元気だしなよ、お姉さま」

「その呼び方はやめて……」

後日、明久は『観察処分者』に認定され、僕は友達から『お姉さま』と呼ばれるようになった……つう。

おまけ

「こんな無茶しなくてもお金なら僕が出したのに」

「え、だつて1万円しかないつて……」

「『今は』つて言つたでしょーそれに話は聞いてくれないし……」

「じゃあ、僕が観察処分者になつたのつて……」

「無駄じやつたな」

「……」

7話（後書き）

これで予習編は終わりです。

次からはFクラス編を投稿開始します

第1問（前書き）

ちょっと強引ですがFクラス編スタートです。

第1問

問 以下の問いに答えなさい

『調理のために火に掛ける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めるとき問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎に掛けると激しく酸素と反応する危険であるという点。

合金の例・・・ジヒラルミニン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのです
が、姫路さんと同様引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払つてなかつたこと』

教師のコメント

そこは問題じやありません。

鎌木瑞穂の答え

『』

教師のコメント

おや、鏑木さんはテストを欠席していたのになぜ名前だけ書かれた答案用紙があるのでしょう

吉井明久の答え

『合金の例・・・未来合金（すいごん）』

教師のコメント

「強く強いといわれても、

「めずらしいな鏑木が遅刻なんて」

4月

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っている。

僕が転入した時期にはもう散ってしまっていたので見るのは初めてだけど、どこか懐かしく一瞬田を奪われるくらい綺麗な景色だ。

「西村先生おはようございます。ちょっと病院に寄っていたので遅くなりました」

「病院？ああ、珍種のインフルエンザか…で、どうだつたんだ？」

クラス振り分け試験の日、起きた時ちょっとదるいなあと思つたら祖父が部屋に入つてきて何故かそのまま病院に連れて行かた。診察してもらつたら

『インフルエンザM型に感染されているみたいですね…』

と言わた。何でもM型は、熱や咳はそれほどでもないが感染力が強く完治するのに時間がかかるそうだ。

聞いたことのないものだつたがお医者様が言つのだからそつなのだ
るづ

「はい。しっかり治つたみたいですね」

「そつが…しかし残念だ。鎧木ならAクラスの代表にだつてなれた
だるに…」

そう、『試験を休んだり途中退席は無得点扱いとなる』といつ決まりのせいでの点になつてしまつたのだ。

学園長についてもテストで出た結果だつて…「うー

「まあ、決まりですから仕方がないですよ」

「そつか」

そうじつて僕に封筒を差し出してきた。その封を切り紙を開きクラスを確認する。

まあ、見るまでもないけど…

『鎧木瑞穂……Fクラス』

「まあ、がんばれ」

こうして僕の最低クラス生活が幕を開けた。

「瑞穂わ～ん」

「は～？あ、姫路わん」

教室に向かつて歩いていると声をかけられた。

「どうしたの？姫路わんも遅刻？あといつかたけひFクラスしかないはずだよ～。」

姫路わんとは一度明久のことで話しかけられ、そのことがきっかけで仲良くなつた。僕は男なのになんて心配をしてくるのや～…。

「試験中熱がでて最後まで受けられることが出来なかつたのでFクラスなんですね。一緒に来ませんか？」

「うん、いいよ」

そして姫路わんと話しながら教室にむかつていると

「わ～いえばF班って瑞穂わんはFクラスになつたのですか？」

「えと、インフルエンザM型に感染しちゃつて…」

「M型…ですか？」

そうこうと姫路さんはあいに手をあて何か考えている。

「あの、そー』『あ、』』』みたいだよ』『あ、』』』

話していると教室が見えてきた。今の時間だと自己紹介の途中かな？

『』』』ダアアーリイー』』』

……

「あの、入らないんですか？」

「あ、ごめんね。今入るから」

そして2人で一緒に教室に入った。

side 明久

ただ名前をつげるだけの自己紹介が続いている。

(ふあ、長いな~眠くなってきた…)

そんなことを考へていると不意に教室のドアが開いた。

「「遅れてしません」」

『えつ？』

教室全体から驚いたような声が上がる。そりやそうだ。ドアを開けて入ってきたのは2人の少女だった。

しかし、ただの少女ではない、2人ともAクラス上位に入る成績でおまけに美少女だ。Fクラスに来る理由がない、

「ちよつと良かつたです。今自己紹介をしているといひなので君達もお願いします」

しかし、担任の福原先生は平然とそう言つ。

「は、はいーあの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします…

小柄な身体をわざと縮こまらせるようにして声を上げる姫路さんと、

「鏑木瑞穂です…よろしくお願いします」

すらりとした長身に天使の微笑みをつかべている瑞穂。
あ、鼻血が…

「はいっー質問です！なんでここにいるんですか？」

男子生徒の1人がクラスメイト全員共通であるつ疑問を質問する

「そ、その…振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました…

「僕は病気で休んで試験自体を受けることが出来なくて…」

えと、そういう場合無得点扱いになるからFクラスになると…。つまり…

『「つねおおおおおお』』

瞬間、教室中から上がる声、

「男だらけのこのむせい教室に二人の天使が舞い降りた…。背丈に反してFはあるつ癒しを握らす『豊乳の天使』、『

「そして、転校から一年もたたないのに

『彼女にしたい女性NO・1』『お姉さまと呼びたい女性NO・1』『MS・文月学園』の三冠を見事達成し何人もの人がときおり見せるその微笑みで同性愛という新しい道へと誘い込んだ『微笑みの天使』…！

データによると去年この学園の中だけで200名を越す女性が迷い込んだようだ。学外も数えると計測不可能!』

「こきなりの降臨ではさすがのクラスメイトも驚きほほぜんとしていましたね」

「はい、しかしここに居着くことをしるやいなやこの歓声…宝くじに当たつたつてこんなに喜びほほしないことこうへりこ喜んでいます…」

「まあ、彼らにとっては宝くじに当たるよりも天使達と同じ教室にならほほづが難しかったんだじょつ

なんか実況みたいな」と言つてゐるし…

「なあなあ、夢じやないよな！－本当だよな本当だよな！本当本当ホントホント『ひさい（どすつ）』『ひつ…』

「あ、わりい…強すぎた、大丈夫か？」

「い、い…」

「ん？」

「いー…、気持ちいい、もっとぶつてくれ～」

「あや～」ひらくんな変態…！」

なんか目覚めてるし…これは想像以上にバカだらけだ。

「はいはい。みなさん、静かにしてくださいね」

パンパン、と教卓を叩いて先生が警告を発し…

バキイツ バラバラバラ…

ゴリ膚となつた。まさか軽く叩いただけで崩れ落ちるとはさすがにみんなこの光景には絶句してる

「え～…静かになつたようですね。私は替えを用意してくるので2人は空いている席に座つて待つていてください」

そつ告げると先生は教室から出でていき2人は僕の席から2つほど離れた席に着いた。

よし、席も近いし話しかけてみよう。

「あのや、姫』姫路』」

「雄一、どうして邪魔をするかなあ！！

「は、はいっ。えーと…」

「この人は坂本雄一」といつて僕の友達。あと雄一も一方的な知り合いなんだからいきなり呼ぶと姫路さんが困るじゃん

「すまない。聞いていたとおり坂本だ。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願ひします」

「ところで2人とも、体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

思わず口を挟んでしまう。試験の時の彼女は相当具合が悪そうだったし…

「よ、吉井君…？」

僕の顔を見て驚き、きょろきょろと隣の瑞穂の顔と僕の顔を交互に見ている。僕と瑞穂と比べても嬉しくない答えしか出ないのに…。

「姫路。明久がブサイクですまん。だからそんなに瑞穂と比べないでやつてくれ」

え？なにこれ？フォローなのかもしれないけど、そんな直球で言わ

なくても…

「そ、そんな！確かに瑞穂さんは目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、とっても美人ですけれど、吉井君だって…その…み、瑞穂さんが綺麗すぎるのがいけないんです！」

「そ、それってひどいと思つよ。僕だってこの姿勢で苦労しているんだし…」

「贅沢な悩みです。私ももっと可愛ければ自信がついてきっと…君に…」

「大丈夫だよ。姫路さんは今まで充分魅力的だよ」

2人の雑談を見ていると成績がよくても中身は普通の女の子なんだとわかる。それでも、いやだからこそこんな酷い教室で学んでいくのははどうなんだと思つ。

「…雄二、ちょっといい？ここじゃ話しへから廊下で」

「んで、話つて？」

廊下に人影はない。ここなら安心だ。

「1Jの教室についてなんだけど…」

「ああ、想像以上に酷いもんだな」

「Aクラスの設備は見た?」

「…明久そろそろ先生も戻つてくる。なにがしたい?」

く、たつたこれだけのことで僕が頼みがあることを読むなんて…、
仕方がない、

「Aクラスに試召戦争をやつてみない?」

「何が目的だ」

どうしようつ素直に姫路さんと瑞穂のためつていうのは恥ずかしい『
なるほど、あのふたりのためか』…し、え、心を読まれた!まさか
超能力『声に出てるぞ』……僕のバカ…

「今更だな、おつと先生が戻ってきた。教室に戻るぞ」

「あ、うん」

雄一に促されるまま僕は教室に戻った

side out

side 瑞穂

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

明久が雄一を連れて出ていったと思ったら、一、二分で戻つて来た。
その時なぜか明久は落ち込んでいたけどどうしたんだろう?

「俺の名前は坂本雄一だ。坂本でも代表でも好きなように呼んでくれ」

考え方をしているうちになぜか雄一は教壇に上がつていた。

「さて、皆に一つ聞きたい」

そういう視線を教室の各所に移り出す。これには純粋にうまいと思つた。間の取り方から視線の誘導まで…人の扱い方がうますぎる。これがカリスマというものなのかな?

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

これらを順番に眺めた後一言

「…不満はないか？」

『大ありじやあつー！』

Fクラス生徒の魂の叫び。

「よつてFクラスはAクラスに『試召戦争』を仕掛けようと思つ」

第2問

Aクラスへの宣戦布告。それは現実的に考えて無理があると想つ。テストの点数がそのまま戦力になる試合戦争だとAクラスとFクラスの戦力差は竹槍と鉄砲くらいある。

「勝てるわけない」

「これ以上設備を落とされたくなー」

「姫路さんと鏑木さんがいたら何もいらない！」

……教室のあちこちから聞こえる不満も仕方がないだらつ。

「そんなことはない。必ず勝てる」

「何を馬鹿なことを

「なんの根拠があつてそんなことを

「「女神様愛します！」「

……雄一の宣言にも否定的な意見が返つてくる。

しかしその雄一は意地悪そうな笑みを浮かべ壇上から頭を見下ろしている。

「根拠ならあるぞ」

そう、FクラスはAクラスに絶対勝てない……普通なら。

「それを今から説明してやる。おい、康太。畠に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「…………（ブンブン）」

「は、はわつ」

必死になつて顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太と呼ばれた男子生徒。

姫路さんがスカートの裾を押されて遠ざかると、顔についた畠の跡を隠しながら壇上に歩き出した。
相変わらずだ・・・だけどそれはふつーに犯罪だよ？

「姫路さん、大丈夫？」

「は、はい。大丈夫です、瑞穂さん。でも見られるなら吉井君に見られたかつたです。…せっかく今日は新学期初日なので前に買ったかわいい下着でしたのに」

「なんだか姫路さん去年と比べてパワーアップしない？…変な方に…」

去年までだつたら恥ずかしそうに顔を真っ赤にさせていたはずなのに、なんでホントに残念そうな顔をしているんですか！？

それに僕は男ですよ。そんなこと話されても、その…困ります…。

顔が熱い…絶対に顔、真っ赤になつてるよ…

「（かわいい…）翔子ちゃんから教えてもらつたんです。…待つているだけじゃダメ。攻撃あるのみ』って」

霧島翔子、Aクラス代表の女の子で幼なじみである雄一のことが大好きで時々過激な手段にされることもある。

何度も学年首席の座をかけて争ったことがあり、その縁で知り合い仲良くなつた。

今では姫路さんと3人で勉強したり遊びに行つたりしているけど紹介したことを見つめ後悔する。

「姫路と瑞穂のことは説明することもないだろ。皆だつてその力はよく知つているはずだ」

「え？」

「わ、私たちですか？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待してる」

「ああ、試合戦争のことか。危ない、話を聞いていなかつたので何のことかわからなかつたよ。

「そうだ！俺たちには女神様がついているんつだ！」

「彼女たちがいれば何もいらない」

「「I LOVE MINO- I LOVE MINO-」」

…………いつのまにかクラスの士気は最高潮まで高まつてゐる。

ミズホ ノ レベル ガ アガツタ
ミズホ ハ スキル ラスルー』 ヲ オボエタ

ミズホ ハ オトナニ イッポ チカヅイタ
ミリョク ガ 530000 —ナツタ
オトコ ガ 27 ニサガツタ

いや、おかしいでしょ！！

スキル発動！！『スルー』

……もういいや……

ともかく、教室内に、いけそうだ、やれそうだ、そんな雰囲気が満ちている。

「それに、吉井明久だっている」

・・・・・シン――――

そして一気に士気下がった・・・・

「ちょっと雄二！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶの？！ 全くそんな必要はないよね！」

「誰だよ、吉井明久って」

「聞いたことないぞ」

「ホラ！ 折角上がりかけてた士気に翳りが見えるし！ 僕は雄二たちは違つて普通の人間なんだから、普通の扱いを―――って、なんで僕を睨むの？」

雄一の悪い癖がでてるよ。…。

ほんと雄一は明久を弄るのが好きだね。

「 そ う か。 知 ら な い よ つ な ら 教 え て や る。 」 こ こ の 肩 書 は 『 観 察 处 分 者 』 だ

あ、言つちやつた。

「・・・それって、バカの代名詞じやなかつたつけ？」

クラスの誰かそんな致命的な台詞を口にする。

「お茶田さん、おめでたー！」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄一！」

「おいおい。観察処分者つてことは、特例として物に触れるようになったけど、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？」

「だよな。それならおいそれと召喚できない奴が一人はいるってことになるよな」

『ふん、もともと試召戦争をしかける理由もない。

「ここには学年屈指の美少女が3人もいるのだ。この教室のどこに不満などあらうか、いやない！！！」

ああ、士氣が下がつただけじゃなく戦争反対の意見まで出しあたよ…。」の空氣、雄一はどうするのかな。

「やつこえば、瑞穂の召喚獣は巫女服を着ていたな…」

『ものども戦じや…………』

「…………おおね…………」

『戦場がワシリをよんどる…………』

「…………おおね…………」

たつた一言で士氣を回復させた。

兵士たちは今から国を落としに行くのかつてくらいに士氣が高い。まとう空氣も血に飢えた武士のよつで恐い…。
姫路さんも涙目だし……。

「つて、雄一！僕は恥ずかしいからあんまり召喚しないよ」

「そのこぎだ。俺たちの力の証明として、まずはロクラスを征服してみよつと思ひ。全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

「…………おおね…………」

「あ、あのー」

「では明久にはロクラスへの宣戦布告の使者になつてもいい。無事大役を果たせー。」

「ゆ、雄一？」

「まかせとけつ！！」

ユウジ ノ スキル „スーパースルー“ ガ ハツドウ シテイル
ミズホ ノ コエ ハ スル サレタ

ミズホ ハ ココロ ニ 53 ノ ダメージ ヲ ウケタ

「ぐすんっ」

ミズホ ハ ナイテ シマツタ

10分後、明久がボロボロになつて戻つてきたが、
その顔は何かをやり遂げた漢の顔だった。

第3問

雲一つない空から眩しい光が差し込む。春風と共に訪れた陽光に、風ではためく姫路さんのスカートを注視しているムツツリー二を覗いて、雄二、明久、姫路さん、島田さん、秀吉そして僕、全員目を細めた。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に開戦予定だけビ」

「それじゃ、先にお昼ご飯つて」とね？」

「そうなるな。明久、今日は面べりいこまともな物食べろよ？」

「やう思つならパンでもおじつてよ・・・」

「えつ？ 吉井くんつてお昼食べない人なんですか？」

姫路さんが驚いたような顔で明久を見る。

「いや。一応食べてると」

「あれ、食べてるとは言えないよ...。水と塩しかとつてないんでしょ？」

おもわず突っ込んでしまつ

「あらんと砂糖だつて食べてるさー！」

「あの、吉井くん。水と塩と砂糖つて、食べるとは言いませんよ。」

・

「舐める、が正しい表現じゃな」

「カロリー、塩分、水分のみ。五大栄養素をちゃんととらないと病気になっちゃうよ。」

何で明久は体調を崩さないのだろう?普通なら栄養失調で死んでもおかしくない生活をしているのに…。

「失礼な、ちゃんととりますよ」

「ほう、明久。五大栄養素が何なのか知っているのか?」

「知ってるよ! ?砂糖 ?塩 ?水道水 ?雨水 ?湧き水 だよね!!」

それで生きていけるのは明久だけです。
なんか、明久を見る目が皆妙に優しい。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪い」

「し、仕送りが少ないんだよ。」

そんな明久を見かねてか、姫路さんがこんな提案をしてきた。

「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましょつか?」

「え？」

本当に積極的になつたね。

「本当にいいの？ 僕、塩と砂糖以外のもの食べるなんて久しぶりだよ！」

「はい。明日のお皿で良ければ」

「うん！ 楽しみだな」

「わかりました、はりきつて作りますね」

その一言で僕は固まつてしまつた。

姫路さんの料理は普段は普通においしく食べることが出来る。

最初は自分のセンスで選び創つていたため生死をさまよう味だったのだが、霧島さんと2人で必死に説得した結果渋々ながらレシピ通り作つてくれるようになつた。

しかし「はりきつて」や「頑張つて」がつくと封印が解放され、独創的な味の兵器を創つてしまつ。

しかもどんなに説得しても中止も改良もしてくれない。

これは明久、死にましたね…。

「ふーん。瑞希ってずいぶん優しいんだね。吉井だけに作つてくるなんて」

面白くなさそくな島田さんの言葉。その言い方には棘があつた。

「あ、いえ！ その、盐さんこも・・・」

「俺たちにも？」

確認のため聞き返す雄一。

「はい。嫌じゃなかつたら

「それは楽しみじゃのう」

「・・・・（「ク「ク）」

「・・・・お手並み拝見ね

つていつの間にか全員分創つてへる話になつてゐる・・・

「あの大変だと思つしいいよ」

「いえ、一つ作るものもつ作りのもあり変わらないですか？」

「姫路さんつて優しいね」

「そ、そんな」

いきなりの明久からの言葉に姫路さんの顔が真っ赤に染まる。

「今だから言つたび、僕、初めて会つ前から君のこと好き『明久。今振られると弁当はなくなるぞ』にしたいと思つてました」

「そしてとんでもない」と言った。

「明久。 それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じやぞ」

「明久。 お前はたまに俺の想像を超えた人間になるときがあるな」

「だつて……お弁当が……」

みんなは気づいていなかつたみたいだけど一瞬姫路さんの田が獲物をねらう獣の田になつていた。

そして、島田さんは般若のような顔をしていた。

「……恐いよ……

「さて、話がかなり逸れたな。 試召戦争に戻る」

「雄一。 一つ気になつっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ? 階段を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負にでるならAクラスじゃろう?」

「わつといえば、確かにそうですね」

「まあ色々と理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦つまでもない相手だからな」

「え? どういふ事雄一?」

「明久。 周りの面子を見てみろ」

「えーっと……美少女3人と馬鹿が2人とムツツリが1人いるね」

「誰が美少女だと…？」

「ええ！？雄一が美少女に反応するの…？」

僕はバカのくぐりに入りたいよ…

「とにかく、姫路と瑞穂に問題がない以上、Eクラスとの戦争は意味がないことだ」

「それなら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「景気づけにしたいと最初に言つたろ？それに、さつき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

「あ、あの！」

「ん？どうした姫路」

「えつと、その。さつき言いかけた、つて…・吉井君と坂本君は、前から試合戦争について話し合っていたんですか？」

「ああ、それか。それはついさつき明久が姫路の為つて『それはそうと…』…・・・」

「明久、そこまでさえぎつてもあまり意味無いよ…」

「と、ともかく雄一、さつきの話、Dクラスに勝てなかつたら意味がないよ」

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。いいか、お前ら。ウチ

のクラスは——最強だ

明久の不安を笑い飛ばす姿は自信に満ちていた。

僕はその姿を見てかつこいいと思つと同時に……羨ましいと思つた。

「いいわね。面白そうじやないー」

「そうじやな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「・・・（グッ）」

「が、頑張ります！」

「召喚するのは恥ずかしいけど……やるよー。」

「やうか。それじゃ、作戦を説明しよう！」

涼しい風がそよぐ屋上で、僕らの勝利の為の作戦に耳を傾けた。

あ、お弁当アヒルかよ!.....。

第3問（後書き）

次はDクラス戦です。

第4問 VS デクラス

問 以下の問いに答えなさい。

「女性は（ ）を迎えることで第一次性徵期になり、特有の体つきになり始める」

姫路瑞希の答え

「初潮」

教師のコメント
正解です。

吉井明久の答え

「明日」

教師のコメント
随分と急な話ですね。

土屋康太の答え

「初潮と呼ばれる、生まれて初めて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達するころに初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十一歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される」

教師のコメント
詳し過ぎです。

鏑木瑞穂の答え

「せ、せ、せ…書けません…」

教師のコメント
萌えました。

「吉井！瑞穂！木下達がFクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入つたわよ！」

あの後、僕は回復テストを20分だけ受けさせられ、今は前線に立つて指揮をしている。

何でも僕がいるかいないかでやる気が全然違つたりないので満場一致で決まった。

姫路さんにもついてきて欲しかったが彼女は秘密兵器らしいので今は教室で回復テストを時間いっぱい受けるそつだ。

僕もそうなるはずだったが、いつの間にか出来ていた僕のファンクラブ発行の『瑞穂様新聞』により、僕がFクラスに所属していることが知れ渡つていたため『秘密』兵器として使うことが出来なかつた…。

と、秀吉達に救援に行かないと。

「アンタの指を折るわ。小指から順番に、全部綺麗に。」

考え方やめて顔を上げるとなぜか明久が島田さんに追い詰められた。

「二人とも、敵はDクラスだよ！仲間同士で争つていたら勝てるものも勝てなくなるよ！」

それに早く行かないと戦死者が増え士氣にもかかわる。

「さあ来い！　この負け犬が！」

「て、鉄人！？　嫌だ！　補習室は嫌なんだっ！」

「黙れ！　捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！」

戦死者が西村先生補習室へ連れて行かれている。

前線はとても激しそうだ。

それにしてもらじうしてそんなにいやがるのだろう？

ただ補習を1・2時間受けるだけなのに…

「あんな拷問耐えられない！」

「拷問？　それは違うぞ。これは教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは一富金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやるつ！」

「さ、流石にそれはやりすぎだと思います！」

それはもう補習じゃなくて洗脳です。

「い、嫌だ！－まだ『巫女巫女瑞穂ちゃん』を見ていないのに…！」

「せ、せめてこの場で補習を……、補習室だと壁が邪魔で見るのは出来ないんだよ…………」

「ん? どうかしたか? 鏑木」

「……え、補習頑張つてください」

「? おひ」

「だ、誰か! 助けつ イヤアアー」

さて、明久達は……島田さんに関節をきめられてますね。

「島田さん」

「え、あ、瑞穂? ……吉井! 瑞穂はどうなのよー。ウチよりも胸ないわよ」

いえ、男なので女性よりも胸があると問題があります……

「……え、瑞穂の胸? 瑞穂はそれでいいんだよ」

「やうだよ。僕はあと」

「無い胸をして恥ずかしがる姿と普段の凛々しい姿のギャップが、じつ……胸に来るものがあるじゃないか」

明久は普段僕をどんな目で見ているんだ? 「……。

「ここでに、やんな」としたことは一度もない。

「た、確かにそつだけど……カビー・ビーフしてウチの扱いがこんなにひどこのよ———！」

「うふ、うふと畠田さん落ちつけ ギヤアアアア———」

……わづこせ。

「明久と畠田さんは後で追いつくよ———みんな、秀吉達を助けに行くよ———！」

「　　「　　「　　「　　おおおおお———」「　　「　　「

「わづこせウチも優しくしなせ———」

「ギヤアアアアア———！」

まあ、聞いていないと思ひたが

「へ、さすがロクラス。このままじや厳しきのじや」

初めのうちは士氣の高さで押していたのじゃが時間がたつにつれやはり地力の差がでてきて今じゃどこも崩壊寸前じゃ。

「田中がやられそうだ！！」のままじや布施先生側は残り4人なつてしまふ。応援を頼むつ……。」

「五十嵐先生側にも応援をつ……。」

「もうすぐ救援が来るはずじゃーなんとか耐えるのじゃ」

ワシ自身もずいぶん点数を削られてしまったわい。

しかし健闘むなしく防衛戦が破られてしまった…。
そしてそこからDクラスが突撃してくる。

「Dクラス鈴木、勝負を挑む！！」

これは戦死したかの？…。瑞穂、明久、みんな。後はよろしく頼むのじゃ…。

「その勝負、僕が受けます！試^{サモン}獣召喚！」

『えつ』

声が聞こえたと思ったら目の前の召喚獣の胸に穴があき、後ろにいた2体までもがやられていた。

『Fクラス 鏡木瑞穂 VS Dクラス 鈴木一郎&他2名
科学 427点 VS 92点&87点&79点』

浮かび上がるのは見慣れた名前。

「大丈夫、秀吉？ 助けにきたよ」

振り返るとワシの親友が立っていた。

…頭にリボンをつけて…

s i d e o u t

「大丈夫、秀吉？ 助けにきたよ」

声をかける秀吉の召喚獣は戦死寸前まで追い詰められているが、まだ生きている。

何とか間に合つたみたいだ。

「う、うぬ…」

「さあ、ここには僕たちに任せて秀吉は教室に戻つて回復試験を受けに行つてきて。」

「と、ところで瑞穂よ、なぜ頭にリボンをつけておるのじや？」

「へ？ リボン？」

秀吉に言わされて頭に手を持つていくと触れるものがある。

「（……ササツ……）」

ムツツリーーーがどこから持ってきたのか、大きな鏡には確かに頭にリボンをつけた僕が映っている

「つーーーな、何でーーー。」

「…俺が」

忍者の格好をしたムツツリーーーが答える

「ど、どひじここんな事するのちつーー。」

この歳でリボンをつけるなんて…。それに僕は男なのに、拷問にしか思えないよ…。

「…雄一の指示。アルティメイトウエポン…」

（カシヤツ、カシヤツ）

「雄一の指示つてどういふこと?」

「…（くごくご）」

ムツツリーーーに言わられて周りを見るといつもこしている生徒達。その手はなぜか堅く握られふるえている。

「ねえ、これひじりうつ（せむり）ひやいつひらう…」

いつの間にか後ろに立っていた女子生徒に、僕は抱きしめられ耳を噛まれてしまっていた。

「（あむあむ）ああ、瑞穂お姉さまのお耳とつてもおいしいです…（ペニヒ）」

「ひやあ…やめてつ清水さん…これはセクハラだし、それにひじりうつ（せむり）ひやいつひらう…？」

清水美春、男を毛虫のごとく嫌っている女の子が好きな女の子。島田さんと僕をお姉さまと呼び、出会つと必ずセクハラされている。

「あ～ん、お姉さま！美春のことは美春と呼び捨てで呼んで欲しいとあれほど言っていますのに。それと美春はDクラスに所属しているのでここにいても変ではありません！」

そつこつて右手で自分の肛門換歎を指さし、左手を僕の胸にのばして…

「やめて清水さん…お、怒る、やん…！」

「お姉さまのお胸、とつともあつたかい…。今は平らですが美春のお姉さまへの大きな愛で大きく育ててあげます…！…あ、でも美春は小さい方が好きなので悩みます。」

「ほ、僕、は、男だか、ら、む、胸は大きく、な、ならない、よ…」

「お姉さま…。美春の好みに合わせてくれるなんて感激です…！」

「ひや、ひやううう……」

そういうて今度は両手で、しかも服の隙間から手を入れて直にもみだした。

(「のままじや まざいーでも力ずくで振り払つてケガをさせるわけにはいかないし…。そうだ!!）

「F、クラス、かぶ「んつーー、鎧木、み、ずほ、やんつー、Dクラス、す、しみず、あんつーーし、みゅじゅみ、ひやる、ヒ、ひやうーー、しょ、しょうぶを挑みますーーーー！」

『Fクラス 鎧木瑞穂 VS Dクラス 清水美春
化学 427点 VS 94点』

召喚獣が矢を射て一瞬で勝負がついた。

「戦死者は補習———！」

するどどこのからか西村先生が現れ、清水さんを補習室まで連行していく。
助かつた

「お、お姉さまー美春は諦めませんからーこのまま綺麗な身体のままで卒業できると思わないで下さいねーそしていつか美波お姉さまも会わせて（バンッ！ー）」

言葉の途中で扉と一緒に閉ざされた。危険な言葉を残して…

「その、災難じゃつたな

「あ、秀吉。助けてくれても良かつたじやないか！！」

「すまんのう…。しかし、おかげでこゝは戻づいたことじやし、戻るとするかのう」

「戻づいたって？、な！！」

周りを見るといつの中にか血の池が出来ていてその上にロクラス生徒と…Fクラス生徒が浮かんでいた。

「みな先ほどの光景に興奮して鼻血を出して倒れてしまったのじや」

秀吉の言葉に疲れがどつとわいてきた。

「…戻るつか…」

第一陣は明久の隊にまかせればいいや…。

「うむ」

あのあと教室に戻り化学以外のテストを受け、教室で待機していた。さすがの雄一も死人にむち打つほどではなく待機命令を出されたの

だ。

戦争は存在を知られていなかつた姫路さんがDクラス代表の人に勝負を挑み倒し、勝つたらしい。

こうして初めての戦争は大量の血と一人の青年の心に大きな傷を残して終了した。

おまけ

「ふう、ただいまあ」

「あ、お帰り瑞穂ちゃん。おじやましているわよ~」

戦後処理を終えて家に帰つてくると幼なじみのまりやが僕の部屋でくつろいでいた。

「久しぶりまりや。でも勝手に部屋に入らないでよ」

「いや、瑞穂ちゃんとわたしの仲じやつてなに――――――。」

「こいつを向こうにいたと思つたらこきなり叫びだした。

「こつたこじつしたのわへ..」

「瑞穂ちゃんがリボンつけしる~~~~!~~..」

「リボン~あつ~..」

やつこんばあのときのリボンとの忘れてた..。

「あ、まつや、これは...」

「大丈夫、瑞穂ちゃん~ちゃんとわかってるから。いや~、やつと瑞穂ちゃんもわたしの趣味を理解してくれるようになつたか~」

「全然わかつてないよ。放してまつや~」

「だめよ瑞穂ちゃん!これはいわばお祝いなんだからー...」の前はゴスロリやメイド服と西洋風だったから、今回は巫女服や着物と和風で攻めようかしり

「こや-----..」

瑞穂ちゃんの絶叫は屋敷中に響いたが、いつものことなので誰も助けには来てくれなく、瑞穂ちゃんはまりやのおもちゃにそれってしまつたとさ。めでたしめでたし。

第4問　　VS　Dクラス（後書き）

タグにガールズラブと入れた方がいいかな？

第5問

Dクラス戦の翌日、いつも通りFクラスへと向かう。
そう、Fクラスに。

なぜか雄一は負けたDクラスと教室を交換しなかったのだ。

(昨日はそれどないじゃなかつたのでそのままにしていたけど、後で雄一に聞こいつつ)

そんなことを考えていると教室についた。
入ろうとドアに手をかけようとし、

ガララッ (いきなり教室のドアが開いた音)

ドン (飛び出してきた人とぶつかつた音)

「うわっ」 (驚いた僕の声)

バタンッ (廊下に押し倒された音)

その間わずか2秒。

背中とお尻が結構痛い…。

(なんだか最近ついていないな…。なんだか葉月ちゃんに会いたくなってきた…。)

小学生に癒しを求めるのはどうなのかと思つが秀吉だけでは足りないのだから仕方がない。

あつ、葉月ちゃんとはあの後も頻繁に会つていたりする。

そんなことを考え、痛む背中を撫でながら起きあが、れなかつた。見ると固まつてゐる明久が乗つていた。

僕の胸の上に手を置いて……。

side 明久

どうしてこうなつたのだろう……。

島田さんからテストの監督が船越先生だと聞き、全力で逃走したはずだ。

そしてちょうど教室に入ろうとしていた瑞穂とぶつかつてしまいそのまま押し倒してしまった。

んで、なぜか僕の右手は瑞穂の左胸ええええええええ……！
お、落ち着けつ、回想が終わつたら現状確認だ！！

瑞穂の胸に置かれた僕の手えええええええ……！

ち、違う……そこから始めたまんぱくになつて思考がまとまらない。

深呼吸、はあー、落ち着いた…。よし!後はこっちのもんだ。
僕の観察力を持つてすれば現状確認は楽勝だ!

廊下に広がる栗色の髪

こちらを見ている綺麗な顔

胸に置かれたほくの右手

そこから伝わる温かさと柔らかさ

反応する僕の息子

三 て、何してんの、僕！！

息子も今そんな場面じゃないから――――

よし、もう一度

静まりかえつた教室

静まりかえつた「「「「「吉井いいい————！——！——！」

三

遅かつたみたいだ

それからは…

「どうしてウチの胸はダメなのよ-----！」

関節を極められたり、

「お姉さまに何をしますか-----！」

蹴られたり、

「なんて羨ましい」としてんだよ-----！」

殴られたり、

「ふふふ…、よ・し・い・君。そんな悪いことをするのほひの手ですか？」

右手の指を一本一本丁寧に折られたりした。

これらはチャイムが鳴るまで続いた。

しかし、まだまだ不幸は終わらない。

後ろから墓場（人生の）への道先案内人が近づいていることを僕はまだ、しらなかつた…。

「うあー…づがれだー」

「うむ。疲れたのう」

「……（「ク「ク）」

毎回思うけど、どうして普通に接することができるのだろう。
あんな大喧嘩（瑞穂にはそう見えた）した後なのに…。

…しかも明久の傷もいつの間にか治っているし。

「よし、昼飯食って行くぞー！」

勢いよく立ち上がる雄二。午前中ずっとテストを受けていたのにまたたく疲れを感じさせないのはすばしこと感づつ。

「あつ、ウチも一緒していい？」

「ああ、別にいいぞ。瑞穂、おいでくぞ～」

「あ、今行く」

僕も立ち上がり、行こうと

「あ、あの。姫路さん……」

したところで声をかけられた。

「あれ？ 姫路さんどうしたの？」

「えっと……お昼なんんですけど、その、昨日の約束のお弁当を作つてきたので、えと、食べててくれますか？」

話を聞いた瞬間、僕の身体は凍りつき、その後後悔の念が襲いかかってきた。

(アア、ナンデワスレテイタンダロウ……)

寒くて身体がガクガク震え、それなのに汗が止まらない……。
話がまとまったのかみんな教室から出していくのに声が出なくてそれを止めることも出来ない。

「?.瑞穂行くわよ」

そういう手を引く島田さん。

抵抗したくても身体は動かない。

僕の耳にどこからかドナドナが聞こえた気がした……

第5問（後書き）

次話は幕間が入ります

第6話 幕間（前書き）

瑞穂達がまだ進級前と思つて下せー。

第6話 幕間

「明日の予定?」

放課後、カバンに物を片づけていると島田さんが声をかけてきた。

「そ。明日、葉月の学校で授業参観あるんだけど、母さんに急に仕事が入って行けなくなつたのよ。それで代わりにウチが行くことになつたんだけど、それなら瑞穂も誘つて葉月が…」

授業参観か。僕の時は父さまも母さまもこれないときが多くて寂しい思い出ばかりなんだよね。

でも葉月ちゃんにまでそんな思いをさせるのはかわいそうだしね。
「うん。明日は何も予定が無いから大丈夫だよ。それに葉月ちゃんのお誘いだしね」

「ありがと、葉月も喜ぶわ。それじゃあ島田は……」

side 美波

最近、葉月に変な行動が増えた。
髪型を変えたり、牛乳を一気飲みしたり、線の上を頭に本をのせた

まま歩いたり…。

気になつて聞いてみたら

「お姉さまにあつたんです！…とっても綺麗でかっこいんですね！…」

と興奮しながら答えたわ。

お姉さま…ねえ…。

今までの行動もその人に近づくためにしていったのなら納得できるけど、いつたい誰なのだろう？

興味がわいてその人について聞いてみたけど名前は知らないみたい。そのかわり…

「あ、そういうえばお姉ちゃんと同じ学校の制服の優しいけどバカなおにいちゃんと一緒にいたよ」

その人と一緒にいた人の情報…って早速候補に一名挙がったわ！

「葉月、そのおにいちゃんつてもしかしてものすげバカ？」

「へーうん。とってもバカなおにいちゃんでした！」

うん、吉井だわ。

となるとお姉さまは瑞穂かな？

ああ、葉月がお姉さまって呼ぶわかる気がする。

綺麗すぎて嫉妬より先に憧れを感じるなんて初めての経験だったわ。もう女性としての一つの完成型よ！瑞穂は。

…胸は同じくらいなのに…

「葉月、その二人だけどウチの友達みたいだわ」

「本当……お姉ちゃん……お姉さまにっこり教えてください……」

「え、ええ……」

葉月の圧力に思わず頷いてしまい氣づけば知っていること全てを話していて、今度の授業参観にもよぶことを約束せられていたわ……。

でもそれは昨日の話、本当瑞穂が受けってくれてよかったです。
もし断れいたら葉月に…（ぶるい）ちょっと冷えてきたわね…！
明日のために早く寝ましょ…！

…お姉さまの事になると人が変わるからね…葉月は…。

同時刻、一人の哀れな男の娘が面白がった幼なじみによつて完璧なお姉さまを演じられるよつ調k y、仕付k、教育されていくなどとは夢にも思わず夜は更けていった。

side out

翌日

「島田さん。葉月ちゃんのクラスの教室はどうあるのでしょうか？」

「えへと、確かにこの廊下を真っ直ぐ行った所ね

授業参観のため僕たちは小学校に来ている。

…女装して。

「やつりいえば瑞穂、今日なんか言葉遣い違わない？」

「…昨日色々ありまして、今田は元壁にお姉さまを演じることになりました。この服装も同じ理由で…」

なんで今日の事が幼なじみにばれたんだね？

家に帰つたらにやにや笑いながら待つてたし、約束して家に帰るまで車を使つたから1時間もかかって無いはずなのに…

…盗聴器でも仕掛けられているのかな。

「クシユツ」

その時、どこかのメイドさんがくしゃみをしたかは定かではない。

「田那様の命令なので」

「定かではない！」

「ど、どうあえずこの格好は無理矢理させられている物なので僕にはこんな趣味はなく…」

「…」で勘違いされたら社会的に死んでしまう…

「？服装？…………？…………？…………？…………？…………？」ああー。(ポン)

「セー」まで「…」セー」まで考へないと僕が男だつて！」とは出て来ないんですか！」

ちょつと泣きたくなつてきた…。

「「」あん、でもウチの学校で覚えている人は5人いな」と思つわよ」「じつやら僕は男として死んでいたらしい…。

「うへへ、じつせ僕なんか…」

「はーはー、瑞穂は男（の娘）、男の娘。葉月のクラスが見えたわよ」

「うーーー」と

うん。ツツコまないよ。今、僕はお姉さまを演じているんだから。決してこれ以上男のプライドを傷つけたくないからじゃないんだ。美波は「男（の子）、男の子」って言つたんだ。別にツツコむ所なんて無いじゃないか。

：（）にはツツコミを入れてもいい氣がするけど…。
いや、ダメだ…。（）の存在にツツコンでしまつたら必然次の「おとこのこ」にもツツコミが入つてしまい僕にダメージがきてしまう。なんて恐ろしい罠なんだ…！この（）は…！！

「瑞穂何してるの？入るわよ」

「あつ、ちゅうと待つてー。」

s.t.e 葉円

お姉さまに久々にあえます！…とつても、つれしいですつ…！
今日は授業参観なのでお姉さまに葉円のかつやくを見ても、うつんで
す…！…がんばるか～おおー…！

「葉円ちゅん張り切つてゐね」

「授業参観でよくそんなに張り切れるな。めんどうだけじゅん」

友達の英ちゃんどびーくんが話しかけてきたけど

「はつらうじ決まつてこますー。今日はお姉さまが来ててくれるんですけどー。」

そうですねー。それどころかなんでもこの一人はこんなに落ち着いている
んでしょうか？

「こつも話してこぬけどそんなにすゞじ二人なの？それと葉円ちゅん
のお姉さんも来るー。」

じちゃんも会話に入ってきた。じちゃんはお胸がとっても大きくて
かつふぶりをしているからあだ名がじちゃんになつた子です。

「来るナビヒーハーそんなに警戒をするですか？」

「だつて余つたびに恐い田で見てくれるんだもん」

「お姉ちゃんはお胸が小さいことを隠してるので仕方なことです
よ」

葉月はお姉さまが小さいので小さい方がいいです！

『瑞穂何じてるの？入るわよ』

『あつ、ひょっと待つてー。』

『の壇せ…』

「お姉さまが来たのですつ……。」

急いでドアの方に向かう。みんなも付いて来てるみたいです。
ドアを開けてお姉ちゃんが入ってくる。
そしてその後には……

「お姉さまつ……。」

そのままお姉さまに抱きついた。

「わっ、葉月ちゃん。こきなり抱きついてきたら危ないですよ」

セツヒツと葉円を優しく受け止めてくれました。

「えへへ～、『めぐなせ』です

でもお姉さまはまといてもこいがするのやめるいとは無理なのです……

「綺麗…」

後ろを見ると英ちゃん達二人が、あつー
友達をお姉さまに紹介しないと

「お姉さま、お友達の英ちゃんどびーべさんとひやんですか……」

「うううう、うんうね」

「うううう、今日は葉円かよんぱれて来ましたがみんなも
頑張ってやこうね」

やつらで、ううううと笑顔を見せるお姉さま

「うううう、うんうね」

惚れましたね…

この後のことはすじかつたです…。

みんな授業開始10分前にもかかわらず席に座り、教科書を広げて
予習し始めたのです。

そのがんばりようは入って来た先生が引くくらいすごかつたのです。

授業中もおしゃべりなんてとんでもなく、田線は黒板とノートのみを行き来して、聞こえる音は先生の声と鉛筆とチヨークの音のみ。保護者が引くくらいみんな集中していました。

でも葉月だって負けません……お姉さま、葉月のがんばりを見ていてくださいっ！！！

side out

授業参観も終わり葉月ちゃんをつれ三人で帰っている。

「お姉さま、今日はどうだったですか？」

「うんちじかつたよ。葉月ちゃんも頑張っていたね」

そう言って葉月ちゃんの頭を撫でてあげる。

本当にすごかつた……。あの空気は小学生が纏う物じゃない。有名大学に一回落ち「次落ちたら実家の農業を次ぐ」と親と約束させられた浪人生なみの勉強への取り組みだった。しかもそれがクラス全員なんて……。

「えへへ……」

それでも頑張つたことには変わりないし……

「葉月ちゃん。今日頑張つたご褒美に何か欲しい物はありますか?」

「それなら、家に帰るまで手を繋いで欲しいのです。」

なんて可愛いんだろう。この娘は。

「それへりこにへりでもここです。」

そう言って手を握つてあげる。葉月ちゃんの手はとても小さかった。

「えへへ…、お姉さまの手暖かいです」

そうして僕たちは家に向かつた。

その間葉月ちゃんのお願い通り手は一度も離れたことはなかつた……

おまけ

「では葉田ちゃん。」『やなぎちゃんよ』

ପ୍ରକାଶନ କମିଶନ

家に着いてしまつたのでお姉さまとお別れ…悲しいです…。

「ねえせつべ」ふああああーーー私の姉ちゃんにつかれやーーー』

最初からいたわよ…」

そうでした。お姉さまと一緒にお姉ちゃんも来ていました。
…空氣化していく忘れていました。

「空氣化って、ウチだって！ウチだって！…」

後日、世の中のあまりの理不尽さに明久をボロつた美波ちゃんでした

た

第6話 幕間（後書き）

瑞穂は今のところ葉月ちゃんルートを進んでいます。

第7問（前書き）

今日は短いです

第7問

side 瑞穂

「チュンチュン」

鳥のさえずりが聞こえ田が覚めた。

懐かしい夢を見たせいかまだ夢の世界にいるように感じる。なんだか身体がだるい気がするけど起きないと。

身体を伸ばし眠気を追い出す。

だんだん頭がはつきりしてくると一つ疑問がわいてくる。

(...) ははは(?) だらう...)

記憶があいまいでいつ寝たかすら思い出せないが、ここは僕の部屋ではない。

けれど、ちゃんといつも寝間着を着て寝ている。

「ガチャツ」

考えてこんでいるとドアが開き一人の女性が入つて來た。

知らないけど知つている人だ。

知っているけど知らない女性だ。

うん。彼女のおかげでここがどこだかわかった。
でも、また新しい疑問がが出来たので聞いてみることにした。

「看護婦さん、どうして僕は入院しているのですか？」

あのあと、看護師さんの話によると、僕は劇物の過剰接種による意
識不明の重体だったそうです。

その話を聞いて屋上での記憶が断片的に戻つて來た。

突然倒れた友だつた物

対人最強兵器

笑顔で仲間を売る鬼畜

田の前の大好きな川

隣にいる母様

断片的な記憶と病院で入院している状況をふまえて考へると……なんだ姫路さんの仕業か。

それならこの状態も納得できる。

そういえば久しぶりに母様と話したな。

2ヶ月前は川を渡れずに姿を見ることしか出来なかつたし、姫路さんもレベルアップしたんだなー、ははは、ハハハ、ハハハ

……もしかしてものすごく危険な状態だつたんじや……

と、とりあえず身体を休めよう…
ちょっとだるいけど明日にはだいぶ良くなつていてお医者様も行つていたし、
うん、明日は学校に行けるよつよつ…!

そういうえば、他のみんなは大丈夫なのかな?

第7問（後書き）

2ヶ月前とはもちろんバレンタインの試食。
いつか外伝でかけたらしいなあ…

第8題（前書き）

せひおまかせをいたした

第8問

「瑞穂生き返ったのか！？」

朝、教室に入ると雄一が亡靈を見るような目で話しかけてきた。

「亡くなつた母様と話してきたけど何とか」

「そうか…。でも母親と会えて良かつたな」

「うん。ずっと聞きたかった事も聞けたしね」

…話しておいてなんだけど、この会話はおかしいと思う。
でも周りは気にしてないし僕の気のせいなのかな？
父様に話したときはバットで自分の頭を殴つていたけど…

「とりあえず瑞穂が復活してくれて良かった。これでBクラスに試
召戦争をこじめる！」

「雄一は張り切つてる。けど…

「ねえ雄一、僕まだ2、3しか回復試験受け終わってないよ

一昨日の昼から昨日の分のテストを受けなくて倒れる前に受けた
分しか得点がないのだ。
総合で挑まれたら負けてしまつ…。

「大丈夫だ、瑞穂はクラスの士氣を高めることとアルティメイトウ

Hポンとして、[冗談だ、だから回れ右して帰るな…]

いや、絶対本気だった！田が真剣だった…！

「悪かつたから…と、とりあえず点数が残っている科目を教えてくれ。作戦を考えるから…！」

まあ、いいか

「もう、あの」とは心の奥に封印しておきたい出来事なんだから…。次はホントに帰るよ！」

鼻血も女装（しかも巫女服）もどちらか一つならこつもの」となので何とかなったが同時となると僕の心は耐えきれずトワウマとして刻まれてしまっていた。

なので、ちゃんと釘を指してから点数を貰える。と、

「みずほ…」

「ひ、秀吉？」「ひしたの…？」

「ひしたもひしたもあるか…姫路の料理を食べたかと思つたらいきなり倒れおつて！心臓も止まつており本気で心配したんじやぞ…！」

今回は本気で危なかつたみたいだ…。レスキュー隊の皆さん、ありがとうございました…！」

「ゴメンね、秀吉。心配掛け……」

そうして秀吉を抱きしめ頭を撫でる……。

「許さないのじゃー。親友であるワシをおいて逝く」とは絶対許さないのじゃー……！」

秀吉には本当に心配を掛けたみたいだ。
でも不謹慎だけど嬉しく感じる。

こんなにも誰かの必要にされないと初めて実感したんだから……。

「大丈夫だよ。僕は秀吉をおいてビリにもいかないから……」

何かが僕の頬をつたい廊下に落ちる。

本格的に泣き始めた秀吉を優しく抱きしめてあげる……

「ね、ねえ」

ふと誰かに声をかけられ顔を上げると田中元を押せえた島田さんがいた。

「あれ島田さん、どうしたの？」

「ウチは気にしないんだけど周り見てみて」

そう言われて周りを見渡す。すると…

辺り一面の血の池

前のめり倒れているクラスメイト

息も絶え絶えな雄二

なんてデジャブ…

「さすがアルティメイトウェポン…、なんて威力だ…。この力がつかえれば我らFクラスに敵はないのグハツ」

そつ言い血を（鼻から）吐き出し倒れる雄二

「ホント、この感動の場面のどにに鼻血出す要素があるのかしらね。…まあ、多少服は乱れているけど…」

島田さんが何か言っているけど頭に入つてこない…この光景のせいで心の奥の封印がみしみしと軋み

…壊れた

「わあ～～～～～～～」

「ぬ、み、瑞穂どーに行く氣じゃ～～～

『氣づいたら秀吉を担ぎ学校を飛び出していた。

「まつたく、瑞穂はメンタル面が弱いわね」

飛び出した瑞穂達はお昼になるまで戻つてこなかつた…

第8問（後書き）

これからは更新が遅れます

第9問（前書き）

短いです

第9問

「『』めん…」

あのあと正気に戻り学校に戻ってきたが、時刻はもう昼休みに入りBクラスとの戦争開始までもう時間がない。そう、午前中の回復試験をさぼってしまったのだ。

「まあ、瑞穂だけの責任じや無いから気にするな。不幸中の幸いで数学と得意科目の得点の回復は終わっているし噂も流し広まったから何とかなるだろ」

「ちよつと雄一は頼りになるな。…もしサボったのが明久だったらどうだつたんだろ」

「（ヒヨウ、ドス）もあらんロロス」

「ちよつと雄一…そう言ってカッターをこいつに投げつけないで！…危ないし、まだ何もしてないから…！」

「いや、思考のなかで明久がサボったから制裁しただけだ」

「僕は雄一の頭の中でサボっても制裁されるの…！ってかどんだけ僕と瑞穂の扱いに差が…、ど、どうしてそんな目で見るの…？みんな」

クラスのみんなが明久を優しい目で見ている。

代表として雄二が

「明久、よく考える。

瑞穂は、容姿端麗、成績優秀、誰にでも優しく、学園を代表とするお姉さま。

それに比べて明久、お前はブサイク、バカ、クズ、そして学園を代表とする問題児。

扱いに差が出るのは当然だろ?」

とどめを指した。

「う、うわああ～～～

「あ、明久～！！」

今度は明久が走り去ってしまった。

てゆうか学園のお姉さまって…、本当に選ばれたから否定出来ないし…。

「さて、明久がいなくなつたのでA班は瑞穂が率いてもらつ。確認するがA班はスタートダッシュを決め戦場をBクラスに近い位置に作ることが仕事だ！…お姉さまを守りきれば惚れられるかもな」

「　　「　　「　　「　　おおおお――――――」　　」　　」

雄二から仕事を任せられたけど…

「ねえ雄二」、ツツコミたいけど置いておくとして、得点があまり無いし受けてない科目で勝負を挑まれたら何もしないで戦死だよ？」

「大丈夫だ。そのためにある噂を流したんだ」

キーンゴーン

まだ聞きたいことが有つたけどチャイムが鳴つてしまつた。

「わかつた、信じてるよ……よし、A班出ます！……」

「　　おおおおお————!　　」

そして僕たちは教室から飛び出した

第9問（後書き）

次話でやつとBクラス戦が始まります

第10問 VS Bクラス

「うおー、バツチ来いや！！」

「いや！俺が先だ――――――！」

「テメエらみたいな奴が瑞穂様の相手をさせるわけがねえだろゴラ――！――！」

今僕の田の前ではすさまじい戦いが繰り広げられている。

「はあ」

「いたぞ！Bクラスだ！！」

教室を出でしづらり走つてゐると前からBクラスの人達が歩いて來た。

でもなぜか立ち会いの先生を田中教諭などの世界史の先生で固められている。

確かにBクラスは文系が得意な人が多いけどこの編成は変だと思つ…

「鏑木、まさか学年トップの成績のお前が世界史が苦手とわな…。開始早々で悪いがリタイアして貰うぜーーー！」

「雄一が言つていたのはこれのことかー！」

「いぐゼみんな、『試験召喚ー』」「

「その勝負受けます！『試験召喚ー』」

その喚声に応えて魔法陣が展開されおなじみの召喚獣が出て来て点数が表示される。

『は？』

『Fクラス 鏑木瑞穂	VS	Bクラス 野中長男&金田一祐
子&里井真由子		
世界史 935点	VS	213点 & 204点 &
224点』		

「え？なんですか？世界史は苦手なんじゃ、てかこの点数なに？」

「世界史は面白いから好きで得意なんです」

雄一は僕の得意科目を苦手だと勘違いたせる噂を流したみたいだ。科目が世界史で固められてこむづけになるべく多く倒さないと…。

シユツ ボンツ！！

「ぐわあつ！」

『Fクラス 鎌木瑞穂 VS Bクラス 野中長男&金田一祐
子&里井真由子
世界史 835点 &
224点』 VS 0点 & 204点 &

矢を放ちます 一人倒す。

「戦死者は補習ーー！」

「お、遅れ、まし、た…」

どこからか西村先生が現れ連れられていった。

息を切らした姫路さんもやつてきた。

やはり男子の運動能力には追いつけなかつたみたいだ。

「くっ、姫路瑞希まで來たぞ…！」

「せめて姫路さんはここで倒しておきたいわ

「律子、私も手伝つ！」

「「Bクラス岩下律子と菊入真由美がFクラス姫路瑞希さんに勝負を申し込みます『試験召喚！』」「」

「あ、はい…。『試験召喚！』」「

敵の一體と姫路さんの召喚獣が現れ

キュボツ！

——そして消滅した。

「「「「はやつ！…」「」「」」

『Fクラス 姫路瑞希 VS Bクラス 岩下律子&菊入』
——

早く倒されたせいで表示が点数どこるか名前の途中で止まってしまった。

「戦死者は補習ーー！」

呆然としていた一人が運ばれていく…

「す、いね姫路さん、さつき何をしたの？」

手を突きだしたと思つたら炎が出てきて一體の召喚獣を包み込んで

しました。

「あ、これは一定以上点数を取ると装備できる腕輪の力です。点数を消費する代わりに特殊な攻撃をすることが出来るんです。瑞穂さんも使えるると思いますよ」

確かに僕の召喚獣の手首に何か付いている。

「そうなんだ。でもどうすれば使えるの?」

「ただ、使おうと思つとあとでは召喚獣が自動で動いてくれますよ。」

「うん、わかった。」

折角だから残りの2人に試してみようかな。
召喚獣の腕輪が輝き始め、それにつられるように矢が光る。
その矢を2匹の試獣召喚に射る。
そして矢は胸の真ん中に当たり、
「え?」

矢は相手の胸に刺さった。
そう、消滅ではなく刺さっている。
召喚獣は消えず、
西村先生もアボトボ歩いて補習室に戻っている。
……なんかすいません。

「お、おい。点数を見て見ろよーー！」

『Fクラス 鎌木瑞穂 VS Bクラス 金田一祐子＆里井真由子

世界史 735点 VS 304点 & 324点』

見ると僕の点数が200点減り、2人が100点ずつ増えていた。つまり…

「回復、いや譲るの効果ってことかな」

「なんか知らないけどチャンスだ。いけ！」

なかなか使える能力だとは思うけど今回は失敗だ。
相手を強くしてしまい、しかも2匹ともいつの間にか腕輪をしている。

致命的なミスだ。

―――目がハートになつていなければ…。

「おい、何を」

「ち、違うの…！召喚獣が勝手に

「つぎやー」

矢を受けた召喚獣が次々と仲間を倒している。

「ふつはつは、戦死者は補習へーー！」

「そんな！仲間からの攻撃だから無効じやーー！」

「そんなルールなどないーーどんな理由であれ戦死者は補習ーーー！」

西村先生張り切つてるな

まあ、さつきはフライングして落ち込んでたし仕方がないのかな？
と、考えていると隣にいる姫路さんが話しかけてきた。

「なるほど。瑞穂さんの腕輪の効果は矢の刺さった相手を魅了し操チャームれるみたいですね。」

「強力だと思ひけどなんか喜べないな…」

姫路ちゃんと腕輪の考察をする。相手は味方の裏切りにより混乱中で戦闘中だけどだいぶ余裕がある。

「言つなればキューピットアロー。愛の矢、ですね」

その瞬間、時が止まつた。

あれほどひづねさかつた戦場も皆動きを止めてこじりを見ている。

「…………愛？」

「……お姉さまの……」

「…愛」

『…お姉さまの愛の矢』

異様な雰囲気が漂う。

しかし、その空氣を気づかずに姫路さんは続ける。

「あつーでも点数的にあと7本しか射れませんね…」

「…7…」

「……残り7人が……」

「……お姉さまからの……」

『愛を受け取れる！――』

そこからが酷かつた。

敵味方関係なく僕の愛（矢）を受けよつとし、争い有つた。

最初は矢を受けた2人が集中攻撃をくらいい戦死し、次にFクラスが全滅し、Bクラスだけになつても争い続け、結局…

「…そして誰もいなくなつたとさ…」

「瑞穂さん…」

立つてゐるのは僕と姫路さん2人だけとなつた。

「あの、戻りましょうか」

「…うん」

そして戦場を後にした…

おまけ

「そう言えば何でBクラスの2人をあんなに急いで倒したの？姫路さんなら腕輪を使って点数を消費しなくても剣だけであの2人を圧勝できたと思うけど」

「翔子ちゃんからの教えその3です。『…策を巡らすのもいいけど行けると思つたら全力で行くべし。準備が終わるのを相手は待つてくれない』だそうです。」

「へえ～、霧島さんもいー」と言つね

「はい……ですから隙ができたら翔子ちゃんから貰つたこの薬でお家に連れてきて既成事実を……」

「ちよ、ちよっとストップ姫路さん……それ犯罪だし全力でビルに行くつもりー？」

「え、でも翔子ちゃんは何度も試してくるみたいですよ。毎回わざ少しの所で逃げられているみたいですねけど……」

——霧島さんの教えが広まり僕にも被害が来るのかもうしあとの事だった

第10問 VS Bクラス（後書き）

この2ヶ月色々あってパソコンの前に座れず遅くなりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3944m/>

バカとテストとお姉さま

2010年10月11日00時53分発行